



第60号

(発行所)

真宗大谷派

松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30

TEL (052) 411-5301

FAX (052) 411-5341

携帯 090-1568-4623

(E-mail)

matsuoka@kosanji.or.jp

現代社会にある浄土教

友人Aがこんな事を言っていた。

「親鸞の思想(念仏の教え)は、当時の世相や民衆の知識レベルを考えれば多くの人々から支持されていたのも当然だと思う。

しかし、現代の社会情勢、民衆の知識レベルを考えると支持する人は、少ないと思う」

私はそれを聞いた瞬間、何もこの人はわかってないな、と嫌悪感を抱いた。先人を愚弄(ぐろう)している。今どきの現代人特有の浅い考え方だと瞬時に一蹴(いっしゅう)した。しかし、なぜか引つ掛かるのである。実は現代人である私の本音を代弁していたのではないかと。親鸞聖人の生き

てこられた時代は科学も発展しておらず、情報もなく、さまざまな迷信を盲信する人も多かったであろう。そんな時代の民衆なら念仏の教えをそのままいただく人も多かったであろうと。

そして現代、まだまだ謎なことはたくさんあるが、どんどんと立証、解明されていく世界で、「念仏」「浄土へ往生する」という教えが古く霞かすんで見えるのである。友人Aは、教えを支持する、支持しないという言葉で表現したことも違和感を覚えたが、私にとって念仏の教えが信仰となっていなければ、さほど差異はなからう。

そんな私に「世智弁聡せちべんそう」という言葉が頭をよぎる。「世智弁聡」とは仏の教えの受け入れを妨げる八難の一つで、凡夫の雑多な知恵が邪魔をして仏の教えを拒絶してしまうという意味である。

こんな私を仏はとつくの昔からお見通しだったのである。

仏説阿弥陀經に登場する仏弟子

伊藤和美

十五番目

薄拘羅 はくろ

無病第一、または長寿第一とも称される仏弟子。

この方は生まれて間もないころ、お母さんと川で水浴している時に、お母さんの手から離れ川に流されてしまいました。そうしたら、大きな魚に飲みこまれてしまいました。その魚は下流で漁師に釣り上げられ市場で売られました。

ある女性はその魚を買い、腹を開いてみると、先ほどの赤ん坊が元気に出てきました。その女性は子宝に恵まれず、その子を実子のようにかわいがったと言われています。そのことはやがて実母の耳に入り子供を取り戻そうとしましたが、その女性があまりにも悲しむので、その女性と実母と二人に育てられたと言われています。

その子が出家してからは、絶対に他人に説法をしなかつたと言われています。その理由は、多くの仏弟子の

方々がたくさん説法をしてみえるので、私は「默然」もくぜんという行をしていたと言われています。つまりは、欲が少なく清らかだった薄拘羅は話さずとも生活態度を他人に見せることで教えを伝えたということです。

伝説では薄拘羅は百六十歳まで生きたと言われています。

二十組ご命日のつどい(新年懇親会)

村上三智雄

一月下旬、名駅西の「花亭 美よし」でご命日のつどいが行われた。

名古屋教区駐在である竹原了珠先生りやくしゅうが「私を生きる」というテーマとして法話をされた。その後、懇親会があり、とてもホットな時を過ごさせていただきました。そのご報告と感想をお伝えいたします。

- 一、人は人生経験によって自分（私）の行き方を変えた
いものだ。その変化の時期は正月がピッタリです。
- 二、いやなことや不安なことから自分をごまかさず生き
たいものだ。自分（私）を生かさず人生を過ごすこ
とは苦痛を伴うが、その苦痛を背負って生きるのが
人生ではないか。
- 三、真宗大谷派で有名な僧侶である金子大榮師は「願わ
くは、われに負ける力を与えたまえ」という言葉を
残された。人生で負けを経験して初めて勝つたり、
ほめられたりすることの値打ちがわかるものです。
少し短い法話でしたが、先生のご家族や身近なことか
ら話をされるので面白くて、あつという間に終わった。
その後の懇親会では廣讚寺門徒の方々も多く参加され
ていた。二十組寺院の住職と気軽にお話ができるのも、
この会のいいところだと思います。



守れない 8・11「女の底力」



第 60号

(発行所)

真宗大谷派

松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30

TEL (052) 411-5301

FAX (052) 411-5341

携帯 090-1568-4623

(E-mail)

matsuoka@kosanji.or.jp

現代社会にある浄土教

友人Aがこんな事を言っていた。

「親鸞の思想(念仏の教え)は、当時の世相や民衆の知識レベルを考えれば多くの人々から支持されていたのも当然だと思う。

しかし、現代の社会情勢、民衆の知識レベルを考えると支持する人は、少ないと思う」

私はそれを聞いた瞬間、何もこの人はわかってないな、と嫌悪感を抱いた。先人を愚弄(ぐろう)している。今どきの現代人特有の浅い考え方だと瞬時に一蹴(いっしゅう)した。しかし、なぜか引つ掛かるのである。実は現代人である私の本音を代弁していたのではないかと。親鸞聖人の生き

てこられた時代は科学も発展しておらず、情報もなく、さまざまな迷信を盲信する人も多かったであろう。そんな時代の民衆なら念仏の教えをそのままいただく人も多かったであろうと。

そして現代、まだまだ謎なことはたくさんあるが、どんどんと立証、解明されていく世界で、「念仏」「浄土へ往生する」という教えが古く霞かすんで見えるのである。友人Aは、教えを支持する、支持しないという言葉で表現したことも違和感を覚えたが、私にとって念仏の教えが信仰となっていないければ、さほど差異はなからう。

そんな私に「世智弁聡せちべんそう」という言葉が頭をよぎる。「世智弁聡」とは仏の教えの受け入れを妨げる八難の一つで、凡夫の雑多な知恵が邪魔をして仏の教えを拒絶してしまうという意味である。

こんな私を仏はとつくの昔からお見通しだったのである。